

今週の為替相場見通し(2024年5月13日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		152.75 ~ 155.95	155.79	153.00 ~ 158.00
ユーロ	(ドル)		1.0724 ~ 1.0791	1.0771	1.0600 ~ 1.0870
(1ユーロ=)	(円)		164.41 ~ 167.96	167.81	165.00 ~ 172.00
英ポンド	(ドル)		1.2446 ~ 1.2593	1.2524	1.2400 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	191.70 ~ 195.34	195.11	192.00 ~ 198.00
豪ドル	(ドル)		0.6558 ~ 0.6649	0.6603	0.6500 ~ 0.6700
(1豪ドル=)	(円)	*	100.99 ~ 103.05	102.87	102.00 ~ 104.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 153.00 ~ 158.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

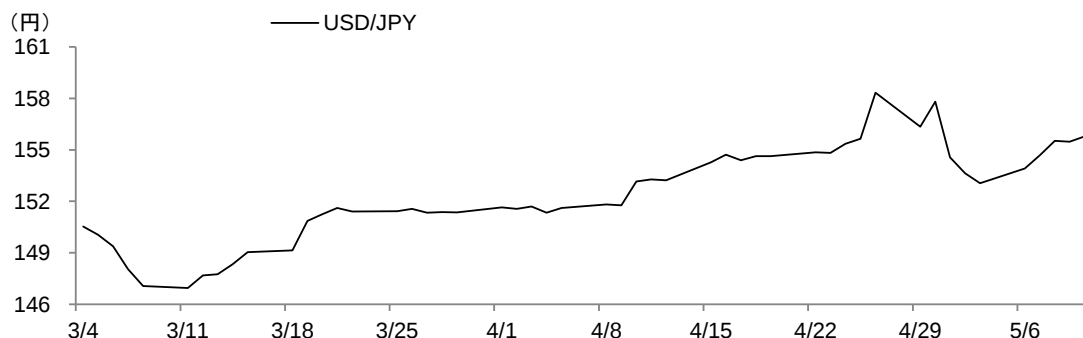
先週のドル/円はドル買い優勢となり、155円台を回復した。週初6日、153.63円でオープンしたドル/円は本邦休場で薄商いの中で154円付近まで上伸後、米金利低下につれて153円台半ばまで軟化。153円台半ばを中心にのみ合い推移となった。7日、ドル/円は154円台を回復。東京時間夕方に、岸田首相と植田日銀総裁との会談後、植田日銀総裁から円安について踏み込んだ発言がなかったことで円売りが加速した。さらに海外時間では、長期間にわたる政策金利据え置きを示唆したカシカリ・ミネアポリス連銀総裁の発言を受け米金利が上昇し、ドル/円も154円台後半へ上伸した。8日、ドル/円は米金利上昇に合わせじり高。海外時間は、ドルの買い戻しが優勢となる中で、FRB高官のタカ派的な発言も支援材料となり、155円台後半まで続伸した。9日、ドル/円は日銀金融政策決定会合の主な意見(4月会合分)がタカ派と解釈され一時的に155円台前半へ下押す場面もあったが、米金利上昇を受け155円台後半へじり高推移。海外時間には一時週高値の155.95円まで続伸後、米新規失業保険申請件数の悪化を受けた米金利低下が重しとなり、155円台半ばに反落した。10日、ドル/円は上伸する日経平均や5・10日に伴い堅調推移。海外時間に発表された米5月ミシガン大学消費者信頼感指数の予想比上振れやボウマンFRB理事からの発言でドル買い優勢は継続、カシカリ・ミネアポリス連銀総裁の発言も下値を支え、ドル/円は155.79円で越週した。

今週のドル/円は堅調な推移を予想。足許、日米金利差は当面縮まらないとの思惑により、投資家によるドル買い基調は強く、また、政府・日銀による介入はあれど円安トレンドの足止めには「時間稼ぎ」の要素しかなく、効果は限定的であるとの見方が多勢。さらに、米政府・当局によるドル高容認姿勢など、ドル/円相場の上昇を連想させる材料がまだまだ揃っている。こうした状況下、今週は日米金利差拡大を見極める材料となる、14日(火)米4月生産者物価指数(PPI)と、15日(水)米4月消費者物価指数(CPI)の発表が予定されており、注目が集まる。PPIおよびCPIが市場予想を上回る場合には、FRBによる利下げ観測後退→米金利上昇→ドル買いの流れから、ドル/円に再び一段と上昇圧力が加わるシナリオを想定しておきたい。一方、PPIおよびCPIが市場予想を下回る場合には、FRBによる利下げ開始時期の前倒し観測→米金利低下→ドル売りの流れから、発表直後はドル売り・円買いで反応する可能性は高いものの、一巡後は、米金利低下→株高→リスク選好の円売りから、ドル/円が持ち直す予想しており、下値も限定的とみる。尚、上記のほか14日にはパウエルFRB議長講演、15日(水)には米4月小売売上高の発表や、Fed高官による発言機会も連日予定されており、米経済指標結果を受けた発言内容にも注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/6~5/10)の値動き:

安値 152.75 円 高値 155.95 円 終値 155.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0870 165.00 ~ 172.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

5月6日週のEUR/USDは狭いレンジの中での取引となった。東京休場の中、1.0758でアジア時間週初の取引を開始。この日はロンドンも祝日となっていることもあってか、アジアから欧州時間まで終始こう着、ユーロ圏4月PMIもほぼ材料視されず。北米時間に入ると水準を切り上げ1.0790まで上伸するも、上値追いには材料不足。続く7日も同じような展開で東京から欧州時間にかけては1.0760-70台で横ばいの展開。北米時間では1.0780台へと強含むが、GBPの売りに連れて結局戻り売り。8日は1.0740-50で全く動意なしの展開。9日の東京時間はこう着が続いたが、欧州時間ではドル高に連れられて1.0724の週間安値まで下押し。ただ、北米時間になると米5月4週新規失業保険申請件数が事前予想を下回ると、ドル売りに転ずる。EUR/円の堅調推移も見ながら1.0785まで反転上昇。10日は東京時間横ばいの後、欧州時間で4月ECB議事要旨が公表され、6月利下げについて肯定的な内容が見られるも、織り込み済みからかマーケットは反応薄。北米時間に週間高値となる1.0791まで上昇するが、タカ派なFRB高官発言を経て1.0771で取引を終えた。

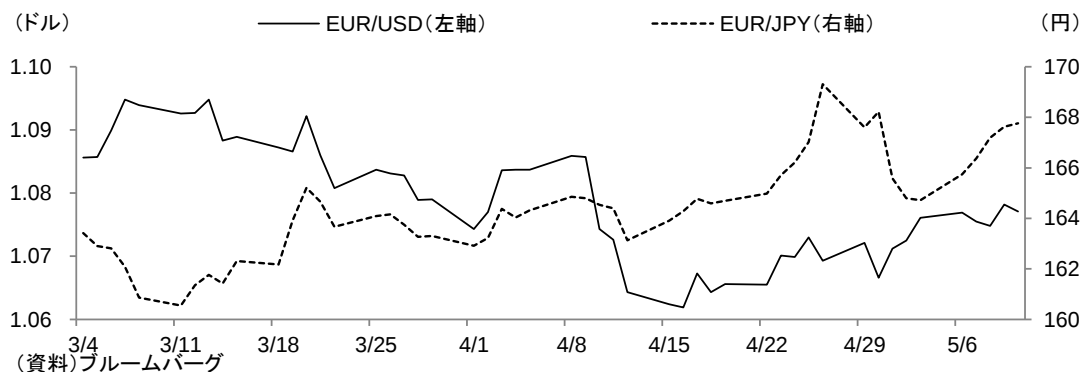
5月13日週のユーロ/ドルは方向感の出ない展開を想定。先週の本欄でも触れたように6月ECB会合での利下げについては市場に織り込み済みと言って差し支えないだろう。むしろ7月会合で連続利下をするかが参加者の関心となっている。FRBに目を向けると6月利下げ観測は後退しており、次回政策イベントだけを切り取ってみるとECB-FRB間でコントラストがついているが、すでに相応に為替市場に織り込みが進んでおり、それ自身が今後相場を大きく動かすとは考えづらい。重要なのは「年内何回やるか」であって、この点が欧米共に確定しない中、いわゆるLiveなので一進一退の相場を想定。結果的にどちらかの通貨が継続的に買われるようなトレンドは出そうになく、データを追っていくイメージで臨みたい。指標関連では15日(水)の米4月CPIでFRBの次回利下げがある程度決まる可能性があり、週を通して最も注目すべきイベントだろう。一方、円については本邦介入のタイミングを見極めながらも円安トレンドと見る。ユーロ/円は上目線で考えておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/6~5/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0724 高値 1.0791 終値 1.0771

(対円) 安値 164.41 高値 167.96 終値 167.81



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2700 192.00 ~ 198.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで反発。5月9日のイングランド銀行(BOE)の金融政策発表がハト派的な結果だったことを受けてポンドが下落する場面もあったが、その後に発表された米新規失業保険申請件数が市場予想を上回った(労働需給の緩和を意識させる内容となった)ことで、ポンドは反発。翌10日に発表された2024年1~3月期の英実質GDP成長率が前期比+0.6%と2023年10~12月期の同▲0.3%からプラス転換し、市場予想の同+0.4%も上回る結果となったことを受けて、ポンドは上げ幅を拡大した。改めてBOEの金融政策を振り返ると、以下の3点でハト派的な内容だったと言える。(1)ラムズデン副総裁が利下げ票を新たに投じ、2月、3月と利下げ票を投じていたディングラ委員に加えて利下げ支持が9名中2名となった。(2) 声明文に「MPCは今後のデータ発表と、データがインフレ圧力のリスク後退を示しているかを検討する」という見解が挿入された。さらに、ベイリー総裁も6月利下げの可能性を否定しなかったほか、市場が想定する以上に金融緩和を行う可能性も示唆した。(3) 市場の政策金利見通しを前提としたインフレ見通しが全体的に引き下げられ、2024年末の見通しが2月時点の前年比+2.75%から今回、同+2.5%に引き下げられた。10日に発表された2024年1~3月期英実質GDP成長率について、業種別の内訳を見ると、製造業の前年比+1.4%、サービス業の同+0.7%と主要業種が牽引した形となっている。

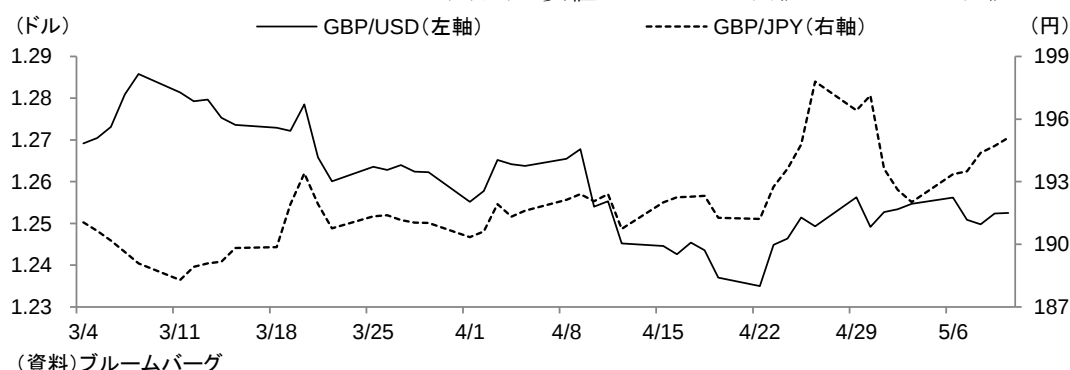
今週の為替市場では、5月15日に米4月CPIと米4月小売売上高が同日同時刻に公表されるため、米国の経済指標次第という側面が大きいだろう。先週の為替市場は、BOEが市場の想定以上にハト派寄りだったと見られるのに関わらず、米経済指標の若干の悪化(しかもそれがそこまで重要統計とはみなされていない米新規失業保険申請件数)によって、ポンド高に押し上げられた。当面は米経済・金融政策主導という動きが継続しやすいだろう。今週発表される英経済指標では14日(火)に労働市場関連統計が発表されるが、週平均賃金は3月までのデータとなり、4月の最低賃金引き上げの影響は反映されていない。BOEの6月20日の会合での利下げの有無を見極めるには、6月11日公表の労働市場関連統計が重要になると見られる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/6~5/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2446 高値 1.2593 終値 1.2524

(対円) 安値 191.70 高値 195.34 終値 195.11



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6700 102.00 ~ 104.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は下に往って来い。週初6日、豪ドル相場は0.66台前半でオープン。東京とロンドンが祝日で流動性が薄い中、3日発表された軟調な米4月雇用統計を背景に1日を通して狭い値幅ながら底堅く推移。7日の朝方一時0.6649と週高値を付けるも、発表された豪1～3月期小売売上高が前期比で▲0.4%と予想を下回った事で下落に転じた。RBAは5月会合で事前予想通り4.35%で政策金利の据え置きを決定。また、声明文ではインフレ見通しの修正ではなく、市場予想よりもハト派的と受け止められたことで0.6590近辺まで一時下落。NY時間、カシュカリ・ミネアポリス連銀総裁が追加利上げの可能性に言及したことでドル買い優勢となり、0.65台後半まで下落した。8日、前日に続き、米金利上昇の流れに豪ドル相場は軟調に推移し、0.6558と週安値まで下落したものの、NY時間には0.6580近辺まで買い戻された。9日、中国4月易収支の結果が好感されたことによる人民元買いが豪ドル相場を支え0.6590近辺まで一時上昇も、米金利上昇を背景に0.6560近辺まで下落。NY時間、米新規失業保険申請件数と失業保険継続受給者数が共に増加した事でドル売り地合いとなり、豪ドルは0.6620近辺まで上昇。10日、0.66台前半で方向感なく推移。NY時間に公表された米5月ミシガン大学サーベイでは1年先、5-10年先の期待インフレ率が予想を上回ったことでドル買いとなり一時0.65台に下落するも値を戻し、結局、0.6603で越週した。

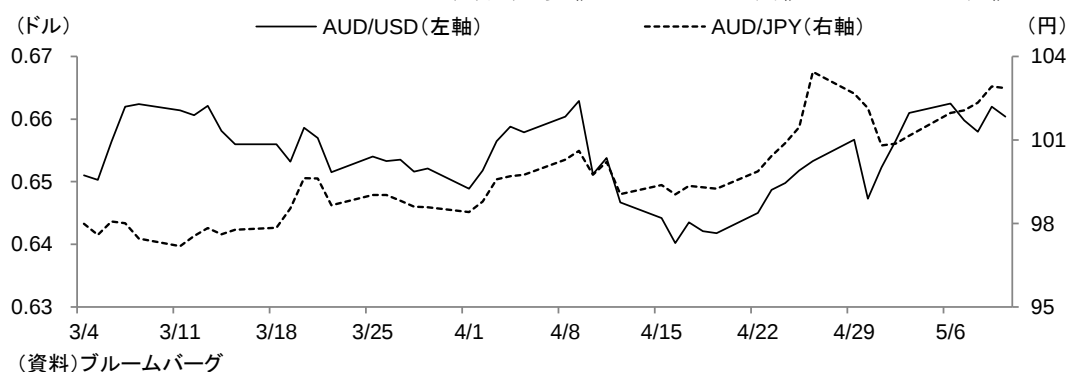
今週の豪ドル相場は底堅い推移を予想する。5月RBA理事会では政策金利据え置きが決定されたが、声明においてはインフレ率が目標レンジまで戻るにはしばらく時間がかかる可能性が指摘されたほか、ブロック総裁は今会合で利上げを検討したことも明らかにした。四半期金融政策報告では、サービス物価の高止まりを背景に今年の消費者物価指数の予想値を上方修正しており、年内利下げ観測は後退している。FEDやECBが次の一手を下りる中でRBAには利上げ余地が残されており、相対的に豪ドルは当面強含みやすいか。今週は15日(水)の豪1～3月期四半期賃金指数、16日(木)の豪4月雇用統計が焦点となる。特に前月の雇用統計では雇用者数変化が予想外に▲0.66万人減少となったが、季節要因の可能性も指摘されている。市場予想を上回ればインフレの粘着性が意識され、豪ドルは買われやすいだろう。また、米国では15日(水)に米4月消費者物価指数や米4月小売売上高が公表されるほか、経済的結びつきが強い中国でも17日(金)に中国4月鉱工業生産/小売売上高/固定資産投資が公表される。結果次第では豪ドル相場を乱高下させる要因となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/6～5/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6558 高値 0.6649 終値 0.6603

(対円) 安値 100.99 高値 103.05 終値 102.87



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。